

山村に幸行しし時の歌二首

先太上天皇、陪従の王臣に 詔して日はく、

「夫れ諸王卿等、宜しく 和ふる歌を賦して

奏すべし」とのりたまひて、即ち口号ばして

日はく、

四二九三番

あしひきの 山行きしかば 山人の 朕に得しめ

し 山づとそこれ

舍人親王、 詔に応へて和へ奉る歌一首

四二九四番

あしひきの 山に行きけむ 山人の 心も知ら

ず 山人や誰

八月十二日に、 二二三の大夫等、 各 壺酒

を提りて高円の野に登り、 聊かに所心を述

べて作る歌三首

四二九五番

高円の 尾花吹き越す 秋風に 紐解き開けな

直ならずとも

四二九六番

天雲に 雁そ鳴くなる 高円の 萩の下葉は も

みちあへむかも